神戸女学院大学論集　第64巻第2号　Kobe College Studies Vol. 64 No. 2（December 2017）　pp. 31-46

成人におけるデートDVの実態とダメージの認知：依存的恋愛観と暴力容認傾向との関連

松並　知子[*1]、赤澤　淳子[*2]、井ノ崎敦子[*3]、上野　淳子[*4]、青野　篤子[*2]

Dating Violence among Adults: The Association between Possessive Relationships, Violence Acceptance, and the Understanding of Damage Resulting from Violence

MATSUNAMI Tomoko[*1], AKAZAWA Junko[*2], INOSAKI Atsuko[*3], UENO Junko[*4], AONO Atsuko[*2]

*1 神戸女学院大学 人間科学部 心理・行動科学科 非常勤講師
*2 福山大学 人間文化学部 教授
*3 徳島大学 保健管理・総合相談センター 講師
*4 四天王寺大学 人文社会学部 社会学科 准教授
連絡先：松並知子　matsunamitomoko@u01.gate01.com

要　旨

500名の成人の未婚者を対象にインターネット調査を実施し、ダメージの認知を含むデート DV 被害・加害経験の実態を検討した。またデート DV の背景には、恋人に依存したり、支配・束縛することを当然と考える「依存的恋愛観」があると考えられるので、依存的恋愛観の項目を作成し、依存的恋愛観や暴力容認傾向と被害・加害経験およびダメージの認知との関連についても検討した。その結果、男女差については、暴力容認傾向は男性の方が有意に高かった。また依存的恋愛観は、「身体的暴力・脅迫」以外の暴力に関しては、男性の方が有意に高かった。被害・加害経験との関連では、男女ともに、被害・加害経験がある人は、依存的恋愛観や暴力容認傾向がより高い傾向が示された。また依存的恋愛観が高い人は精神的暴力を受けた際、暴力のダメージを低く認知していた。本研究では、被害・加害経験があったとしてもそのダメージを低く認知している人の存在が示唆されたため、今後は潜在的な被害・加害経験を掘り起こすような研究が必要である。またデート DV の要因となっている依存的恋愛観を考慮した予防教育が重要である。

キーワード：デート DV、恋愛、ジェンダー、ダメージ

Abstract

An online survey of 500 unmarried adults was conducted to examine the reality of dating violence. In particular, we focused on the association between possessive relationships, violence acceptance, and the understanding of damage resulting from violence. Although a possessive relationship is said to influence dating violence the youth tend to believe in such possessiveness in relationships and depend on and control their partners. The results revealed that men are involved in possessive relationships and violence acceptance more than women. With regard to violence, both women and men who expressed and received aggression were involved in possessive relationships and violence acceptance more than those who did not express or receive aggression. In addition, both men and women involved in possessive relationships tend to estimate lesser damage resulting from assaults when they receive psychological violence. In conclusion, we need to investigate potential violence and develop dating violence prevention programs that take into consideration possessive relationships in the future.

Keywords: dating violence, romantic relationship, gender, damage resulting from violence

1．問題と目的

2001年にDV防止法が施行されて以来、政府や地方自治体はDVに関する調査を何度も実施しており、その中にはデートDV、すなわち恋愛関係における暴力に関する調査も含まれているが、その実態が解明されているとは言い難い。またデートDVに関する学術的な調査・研究もかなり実施されてきてはいるが、その生起要因や背景のみならず、実態についても諸説あり結論が定まっていない。一方、若い世代におけるデートDVは社会問題になっている。

2016年に中高生と大学生2000人以上を対象に実施された調査では、交際経験のある10代女性の44％が被害を受けたことがあると回答している（認定NPO法人エンパワメントかながわ, 2017）。また20歳以上の成人対象の調査でも、交際相手から暴力を受けた経験のある女性は交際経験者の19.1％、男性は10.6％となっており（内閣府男女共同参画局, 2015）、調査によって被害経験率に幅はあるものの、デートDV経験者は少なくないと考えられる。

そこで本研究では、デートDVにつながりやすい恋愛のあり方と暴力に対する態度に注目する。また本研究では、暴力被害・加害経験の有無だけでなく、従来の研究ではほとんど注目してこなかった、暴力によるダメージについても検討する。以下に、本研究で扱う要因について述べる。

依存的恋愛観

デートDVが若者の間に増加している背景としては、小説やドラマ、歌詞など、デートDVを助長するような風潮がメディアを通して拡散されている傾向がある（伊田, 2011；山口, 2016）。田代（2008）は「レディース・コミック」の分析を行い、「恋愛＝性行為＝暴力・支配」という図式が繰り返し表されていること、またその傾向は中高生に人気のケータイ小説でも同様であると述べている。そこには、「恋人は特別な関係であり二人は一体である。相手は自分のものだから自分の好きなように支配してもよい。束縛は愛の証である」というような恋愛観や恋愛至上主義の風潮が見られる。また、牧野・石田・藤田（2012）もコミックの分析を行い、男性が主導権を握るような画一化された恋愛を中心とするストーリーが多いことを報告している。伊田（2010, 2011）はこのような恋愛観こそがデートDVの要因であると述べている。具体的には、「自分と恋人とは一心同体であるから、相手は自分のことをわかってくれて、思い通りになってくれて当然である」という考えからDV加害に、反対に「相手の気持ちをわかってあげて自己犠牲的に尽くすことは良いことである」という思考からDV被害につながる可能性があると指摘している。また、そのような恋愛観をもっている人は、自分たち＝内部、それ以外の他者＝外部という排他性をもっているので、DVが起こってもそれが他の人には知られないことが多い。さらに恋愛至上主義の考え方は「別れることは悪いことだ」という認識につながるため、かなりの被害を受けていたとしても我慢して関係を続けている場合も多い。遠藤（2007）も、相手に暴力をふるわれていても、それを愛情と感じてしまうような恋愛幻想

をもっていることがデートDVの特徴であると述べており、婚姻関係にないがゆえに幻想を抱きやすいと指摘している。

このような恋愛観の背景には自己肯定感や自己評価の低さがあり、見捨てられるのが怖いゆえに、恋人に依存したり、支配・束縛したりする傾向がある（伊田，2010；松並，2005，2008）。先行研究においても、自尊心の低さや他者依存傾向がDVに関連していること（Dewhurst, Moore & Alfano，1992；武内・小坂，2011；吉岡，2007）や、自己犠牲的意識を表す恋愛スタイルであるAgapeがデートDVの被害経験と関連していること（赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野，2011）が報告されている。つまり、精神的に自立できず恋人に完全に依存してしまうような状態こそが通常の恋愛スタイルであるとする恋愛観がデートDVの要因であると考えられるので、本研究ではこのような恋愛観を「依存的恋愛観」と呼ぶ。

この依存的恋愛観の要因にはジェンダー容認感覚が挙げられており、性別役割に基づく「男らしい」「女らしい」ふるまいをすることが支配・被支配につながるとされている（伊田，2010，2011；山口，2016）。羽渕（2013）は、家父長的な男性行動規範、女性行動規範をもつことが女性への暴力を助長すると述べている。特に男性の場合は、統制力を保つことが恋愛関係において重要であり、そのために戦術として暴力を使うことがあると指摘されている（White, Donat, & Bondurant，2001）。女性の場合は、「母性愛こそが女性の美徳」「女は尽くすべき」などの「女性性」に囚われている女性はDV被害者になりやすい傾向があることや（松並，2005）、強い女性性をもつ女性は依存的であることが示唆されている（Carroll, Corning, Morgan, & Stevens，1991）。また、自己肯定感が低い人ほどステレオタイプ的なジェンダーに自分を合わせることで自己価値を上げようとする傾向があるので、暴力を受けて自尊感情が低下するほど、ジェンダー役割にしがみつく悪循環に陥りやすい（小柳，2003；松並，2005）。このようにジェンダー役割意識は依存的恋愛観の重要な要因であると考えられるので、本研究では依存的恋愛観を測定する項目にジェンダー役割意識に関わるものを含める。

依存的恋愛傾向を測定する尺度としては、伊福・徳田（2006，2008）が恋愛依存傾向尺度を作成している。これは現在の恋人との恋愛関係が、対人依存の1つとされている「恋愛依存症」にどの程度該当するかを測定するものであり、恋人の存在を活力や心の支えとするような肯定的な側面も含めてとらえるとしている。したがって、恋人との関係に焦点を当てており、「恋愛観」を測定するようなものではない。また片岡・園田（2008）も、恋人依存尺度を作成しているが、これも実際に行われた恋愛行動や恋愛場面に焦点を当てているため、一般的な恋愛観を測定するものではない。本研究では、特定のパートナーとの関係ではなく、デートDVの生起要因と考えられる依存的恋愛観を測定することを目的の1つとする。デートDVが生じる背景には、上述したようなジェンダー役割意識へのこだわりや自己評価の低さによる依存性などがあると考えられるので、それらに関するものを含む新たな項目を作成して使用する。

暴力容認傾向

伊田（2010）はデートDVをもたらす考えとして、力による支配の肯定と暴力容認感覚を挙げている。力による支配とはデートDVの構図そのもの、つまり、強い側が弱い側を操作

し傷つけることや相手の主体性を奪うことを指すが、力による支配を肯定することは暴力を容認することを意味する。具体例として、若者に人気のケータイ小説が挙げられているが、その物語には暴力的な言動を繰り返す男性がヒロインの恋人として登場し、女性は男性の粗野な態度を認めなければならないというメッセージがあふれている（伊田，2011）。また小説のみならず、多くのメディアには、問題解決の方法として暴力を使ってもいい、暴力は条件付きで許されるなどの暴力容認傾向が見られる（山口，2016）。さらにデート DV 経験者は、暴力はパートナーに影響を及ぼすのに有効な手段であるという認識をもっていることが示唆されている（Cornelius & Resseguie，2007）。つまり、暴力はコミュニケーションの１つであり時には必要であるという価値観がデート DV につながると考えられる。したがって、依存的恋愛観とともに暴力容認傾向とデート DV 経験の関連を検討する。

デート DV 被害に対するダメージの認知

本研究では、恋人からの暴力被害・加害経験とともに、被害を受けた際のダメージの認知についても検討する。先行研究の多くは、暴力経験の頻度のみを測定していることが多く、被害のダメージの認知に焦点が当てられていることは少ない（赤澤，2016）。たとえ暴力の有無や頻度に関しては男性の被害が多かったとしても、命の危険を感じたことがあると答えたのは全員女性であったという結果（李・塚本，2005）や「男性から女性への暴力のレベルは非常に深刻である」と認知しているのは、男性よりも有意に女性が多いという報告もあり（Krahe, Bieneck & Moller，2005）、女性は男性からの暴力をより脅威に感じていると考えられる。つまり、男女で暴力被害の大きさや衝撃が違い、身体的・精神的ダメージが異なることが考えられる（Bookwala, Frieze, Smith & Ryan，1992；森永・Frieze・青野・葛西・Li，2011；上野，2014）。したがって、本研究では、恋人から暴力を受けた場合、悲しみ、恐れ、怒り、苦しみ、憎しみ等のネガティブな感情をどの程度抱くかというダメージの認知についても検討することとする。ダメージの認知についての研究は多くはないが、先行研究では、全ての暴力において女性は男性より強いダメージを認知していたという結果（赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野，2017）や明確に男女差が示されたのは性暴力のみであったという結果（赤澤・竹内，2015）が報告されている。また Miller（2011）は何らかの被害・加害経験があるにもかかわらず、そのうちの約85％は被害者・加害者である認識がないと述べているが、実際には暴力の被害を受けていても、そのダメージを低く認知していたり、ダメージに気づかない人も存在すると考えられる。また、その要因として、暴力行為を愛情と認識したり、自己犠牲的に我慢することが美徳とされている依存的恋愛観や、時には暴力をふるっても構わないとする暴力容認傾向が関連していると予測されるので、ダメージの認知と依存的恋愛観、暴力容認傾向の関連も検討する。

また本研究ではインターネット調査を使い、未婚の成人を対象とした。国内のデート DV 研究をレビューした赤澤（2016）によれば、近年デート DV 研究は増加しているが、未婚の成人対象の研究はわずか4.6％であった。また自治体などが実施した調査でも、既婚者が対象の DV 調査や高校生などを対象にしたデート DV 調査が多く、未婚の成人を対象にしたデート DV 調査はあまり実施されていない。しかし、実際のデート DV 被害・加害経験はむしろ

成人に多いのではないかと推測される。また20代、30代の未婚者が多い現在、この世代の未婚者を対象にデートDVの調査を実施することには意義があると考えられる。

本研究の目的

本研究の目的は、ダメージの認知を含むデートDV被害・加害経験の実態を検討することである。また、デートDVの要因である依存的恋愛観、暴力容認傾向と被害・加害経験およびダメージの認知との関連を検討することも目的とする。仮説としては、デートDV被害・加害経験がある人は、依存的恋愛観や暴力容認傾向がより高いと予測される。また依存的恋愛観や暴力容認傾向が高いほどダメージを低く認知すると考えられる。

2．方　法

調査協力者および手続き

2014年11月、全国の20～35歳未婚者にインターネット調査を行い、500名の回答を得た（女性264名（52.8%）、男性234名（46.8%）、その他2名（0.4%））。年齢の分布は20～35歳、平均年齢は27.88歳（$SD=4.25$）であった。なお、平均年齢に男女差は見られなかった。インターネット調査の実施は専門の調査会社に委託し、調査専門のサイトに登録しているモニターが対象となった[1)]。なお、今回は性別が不明である2名については数が少ないため除外した。恋人から受けた被害経験や加害経験についての質問は、これまでに交際経験があると回答した女性185名（女性の70.08%）、男性144名（男性の61.54%）、計329名（全体の66.06%）を対象とした。平均年齢は28.11歳（$SD=4.05$）であった。デートDV被害・加害経験以外の項目は498名全てを対象とした。

調査内容

依存的恋愛観　依存的恋愛観をもっている程度を測定するために作成した10項目を用いた。作成の際には、伊田（2010, 2011）の「カップル単位の恋愛観」についての記述や伊福・徳田（2006, 2008）や片岡・園田（2008）の項目を参考にし、デートDVの被害者支援および防止教育を行っている複数の臨床心理士、デートDV研究を行っている複数の心理学教員で内容的妥当性を検討した。「そう思う」から「そう思わない」の5件法で回答を求めた（Table 1）。

暴力容認傾向　相原・上田・深澤・一瀬（2008）で検証された暴力意識尺度改訂版（VCR-S）の3下位尺度のうちの1つ『暴力を容認する態度』から、最も因子負荷量が高かった3項目「怒りの気持ちを暴力で発散したら、気持ちがすっきりすると思う」、「問題を解決するのに、時には暴力を使っても良いと思う」、「人の痛みを知るためには、暴力が必要だと思う」を使用し、「そう思う」から「そう思わない」の5件法で回答を求めた。

恋人との交際経験　現在または過去についての恋人との交際経験の有無について尋ねた。

デートDV被害経験　恋人から受けた暴力行為の種類と経験頻度を測定するため、赤澤他

1）モニターは会員登録を行い、インターネット上でアンケートに回答すると、謝礼としてポイントを受け取るというシステムになっている。また、調査への参加依頼はサイトからメールで案内を送った。

(2017) の全18項目を用いた。“あなたはこれまでに恋人から以下の行為を受けたことがありますか”と尋ね、「これまでに一度もない」から「20回以上」の7件法で回答を求めた。なお、交際した恋人が複数いる場合はその中のひとりについて回答するよう教示した。

デート DV 加害経験　恋人に与えた暴力行為の種類と経験頻度を測定するため、赤澤他(2017) の全18項目のうち、「げんこつや怪我をさせるようなもので殴られる」、「無理やりキスしたり、身体に触ったりする」、「性交を強要する」の3項目を除く、15項目を用いた[2)]。“あなたはこれまでに恋人に以下の行為を行ったことがありますか”と尋ね、「これまでに一度もない」から「20回以上」の7件法で回答を求めた。なお、交際した恋人が複数いる場合はその中のひとりについて回答するよう教示した。

デート DV 被害に対するダメージの認知　上記の暴力行為18項目について、恋人から該当する行為を受けた場合、悲しみ、恐れ、怒り、苦しみ、憎しみ等のネガティブな感情をどの程度抱くかについて、「全く感じない（感じなかった)」から「非常に感じる（感じた)」の5件法により評定を求めた。

倫理的配慮

調査協力者は、インターネットを通じ、自由意志で調査に参加した。また調査前に、調査・研究目的を明らかにした上で、回答データは統計的に処理され個人が特定されることはないことや自由参加であり途中で脱落しても不利益がないことを伝えた。なお、本研究は福山大学学術倫理審査委員会に倫理審査書類を提出し、承認を得ている（通知番号 H28-ヒト・2号)。

3．結　果

依存的恋愛観および暴力容認傾向の検討

依存的恋愛観10項目に対し因子分析（最尤法、Promax 回転）を実施した。その結果、1因子構造が妥当であると考えられたので、1因子を指定し再分析した。さらに因子負荷量および共通性が低い1項目「経済力も男性の重要な魅力のひとつだと思う」を削除し、9項目の合計点を依存的恋愛観得点とした（Table 1)。9項目の合計点の平均値は23.57（SD = 4.95）であった。

暴力容認傾向3項目についても因子分析をしたところ、1因子構造が妥当であると考えられた。α 係数を算出したところ、α = .84と十分な信頼性が確認されたため、3項目の合計得点を暴力容認傾向得点とした。3項目の合計点の平均値は5.78（SD = 2.88）であった。

デート DV 被害・加害経験の検討

赤澤他（2017）に基づき、恋人から受けた被害経験を分類した。「友人との付き合いを制限される」など、行動を制限、監視される“精神的暴力：束縛”（3項目)、「否定したり、意見を認めなかったりする」、「相手の意に沿わないと無視される」、「人前で侮辱したり、ののしっ

2) インターネット調査では犯罪経験に関する情報は聴取することができないため、この3項目の加害経験については尋ねることができなかった。

Table 1　依存的恋愛観項目

α = .75	M	SD	因子分析結果（最尤法） 共通性	因子負荷量
1．恋人の間では、干渉は愛の表れだから正当化される	2.60	0.96	.41	.69
2．恋愛すれば、男性はリーダーシップを取ったりおごったりしないといけない	2.46	1.02	.43	.65
3．恋愛すれば、女性は料理をしたり男性の世話をしなければならない	2.26	1.03	.43	.65
4．「プライバシーを尊重し、相手を束縛しない」などというのは、冷たい感じで、付き合っている意味がない	2.36	1.03	.29	.58
5．守ってくれる、依存できる相手がいることは良いことで、お互いを保護するのが「愛」である	3.19	0.96	.26	.47
6．恋愛は特別な関係で、特別な要求を持っても良いし、自分も相手の特別な要求に応じるのが当然である	3.02	0.95	.25	.47
7．恋人の意見も参考にするが、自分のことは自分で決めるのが基本である*	2.00	0.82	.36	.36
8．何でも恋人に伝えなければならないということはない*	2.07	0.94	.27	.31
9．自分の恋人を他人が奪うのは許さないと思うのは当然であり、嫉妬心や独占欲を持つのは当たり前である	3.61	0.92	.21	.27

*逆転項目

たりする」など、否定、無視、バカにされる“精神的暴力：自尊心低下”（7項目）、「げんこつや怪我をさせるようなもので殴られる」、「別れるなら死んでやると言われる」などの“身体的暴力・脅迫”（5項目）、「性交を強要される」などの“性的暴力”（3項目）である。加害経験に関しては、“精神的暴力：束縛”および“精神的暴力：自尊心低下”は被害経験と同一の項目だが、“身体的暴力・脅迫”については4項目、“性的暴力”については1項目という構成とした。なお、調査では7件法を用いたが、暴力行為を頻繁に受けたことがある者は多くなかったため、分析では暴力行為を受けたことがない者を1点、ある者を2点とする2件法に変換した上でそれぞれの暴力行為ごとに合計得点を算出した。信頼性係数は、被害経験については、「精神的暴力：束縛」がα = .83、「精神的暴力：自尊心低下」がα = .87、「身体的暴力・脅迫」がα = .90、「性的暴力」がα = .84であった。加害経験については、「精神的暴力：束縛」がα = .83、「精神的暴力：自尊心低下」がα = .84、「身体的暴力・脅迫」がα = .86であった。

恋人から暴力を一度以上受けたことがある女性は61.6%、男性は52.1%であり、半数以上に被害経験があった（Table 2）。また恋人への暴力行為を一度以上行ったことがある女性は47.6%、男性は45.8%であり、半数近い人が加害経験があると回答しているが、被害経験と比較するとかなり少なかった（Table 3）。

デート DV 被害・加害経験と依存的恋愛観・暴力容認傾向との関連とその男女差

恋人から受けた暴力の被害経験の有無と依存的恋愛観、暴力容認傾向との関連、および、その男女差を検討するために、交際経験のある人を対象に、性別と暴力被害の有無を独立変数、依存的恋愛観と暴力容認傾向を従属変数とし、2要因分散分析を実施した。性別および暴力被害の種類別の依存的恋愛観得点、暴力容認得点を Table 4に示す。依存的恋愛観に関しては、

Table 2　暴力被害経験の有無（人数）（%）

	被害経験の有無	女性 (N=185)	男性 (N=144)
精神的暴力：束縛	有	63 (34.1)	58 (40.3)
	無	122 (65.9)	86 (59.7)
精神的暴力：自尊心低下	有	86 (46.5)	55 (38.2)
	無	99 (53.5)	89 (61.8)
身体的暴力・脅迫	有	30 (16.2)	32 (22.2)
	無	155 (83.8)	112 (77.8)
性的暴力	有	57 (30.8)	31 (21.5)
	無	128 (69.2)	113 (78.5)
全体	有	114 (61.6)	75 (52.1)
	無	71 (38.4)	69 (47.9)

Table 3　暴力加害経験の有無（人数）（%）

	加害経験の有無	女性 (N=185)	男性 (N=144)
精神的暴力：束縛	有	54 (29.2)	39 (27.1)
	無	131 (70.8)	105 (72.9)
精神的暴力：自尊心低下	有	68 (36.8)	49 (34.0)
	無	117 (63.2)	95 (66.0)
身体的暴力・脅迫	有	26 (14.1)	22 (15.3)
	無	158 (85.9)	122 (84.7)
性的暴力	有	11 (5.9)	29 (20.1)
	無	174 (94.1)	115 (79.9)
全体	有	88 (47.6)	66 (45.8)
	無	97 (52.4)	78 (54.2)

Table 4　暴力被害経験の種類・男女別の依存的恋愛観得点および暴力容認得点

				依存的恋愛観		暴力容認	
	暴力行為	性別	n	M	SD	M	SD
精神的暴力：束縛	あり	女性	63	24.40	5.00	5.05	2.64
	あり	男性	58	25.41	4.83	7.02	3.47
	なし	女性	122	22.75	5.52	5.16	2.38
	なし	男性	86	24.37	4.57	6.15	3.09
精神的暴力：自尊心低下	あり	女性	86	23.10	4.86	5.10	2.47
	あり	男性	55	24.42	6.01	6.58	3.41
	なし	女性	99	23.10	4.86	5.14	2.47
	なし	男性	89	25.02	4.71	6.45	3.18
身体的暴力・脅迫	あり	女性	30	24.60	6.07	6.03	2.74
	あり	男性	32	24.88	5.24	7.41	3.60
	なし	女性	155	23.06	5.24	4.95	2.38
	なし	男性	112	24.77	4.54	6.24	3.13
性的暴力	あり	女性	57	24.49	5.97	5.51	2.67
	あり	男性	31	26.74	4.23	7.58	3.79
	なし	女性	128	22.79	5.05	4.95	2.35
	なし	男性	113	24.26	4.68	6.20	3.05

得点範囲：依存的恋愛観9-45，暴力容認3-15

「精神的暴力：束縛」と「性的暴力」に被害経験の有無の主効果が見られ（$F(1,325)=5.31$, $p<.05$；$F(1,325)=10.43$, $p<.01$）、暴力被害経験がある人が有意に依存的恋愛観が高かった。また「精神的暴力：束縛」「精神的暴力：自尊心低下」「性的暴力」には性別の主効果が見られ（$F(1,325)=5.81$, $p<.05$；$F(1,325)=5.11$, $p<.05$；$F(1,325)=8.22$, $p<.01$）、男性の得点が女性よりも高かった。交互作用は見られなかった。暴力容認傾向に関しては、「身体的暴力・脅迫」と「性的暴力」に被害経験の有無の主効果が見られ（$F(1,325)=8.00$, $p<.01$；$F(1,325)=7.09$, $p<.01$）、被害経験がある人の暴力容認得点が高かった。また全ての暴力に性別の主効果が見られ、男性の得点が女性よりも高かった。（「精神的暴力：束縛」「精神的暴力：自尊心低下」「身体的暴力・脅迫」「性的暴力」$F(1,325)=20.57$, $p<.001$；$F(1,325)=20.94$, $p<.001$；$F(1,325)=11.23$, $p<.01$；$F(1,325)=20.94$, $p<.001$）。

次に、恋人への暴力の加害経験の有無と依存的恋愛観、暴力容認傾向との関連、および、その男女差を検討するために、交際経験のある人を対象に、性別と暴力加害の有無を独立変数、

Table 5　暴力加害経験の種類・男女別の依存的恋愛観得点および暴力容認得点

	暴力行為	性別	*n*	依存的恋愛観 *M*	依存的恋愛観 *SD*	暴力容認 *M*	暴力容認 *SD*
精神的暴力：束縛	あり	女性	54	24.50	5.92	5.39	2.58
	あり	男性	39	25.69	5.20	7.18	3.79
	なし	女性	131	22.82	5.10	5.02	2.41
	なし	男性	105	24.46	4.46	6.25	3.02
精神的暴力：自尊心低下	あり	女性	68	24.10	5.73	5.09	2.42
	あり	男性	49	24.90	4.95	7.02	3.53
	なし	女性	117	22.85	5.16	5.15	2.50
	なし	男性	95	24.74	4.57	6.23	3.10
身体的暴力・脅迫	あり	女性	26	24.92	6.75	6.31	2.65
	あり	男性	22	27.64	4.38	8.45	3.29
	なし	女性	159	23.05	5.11	4.93	2.38
	なし	男性	122	24.28	4.57	6.15	3.14
性的暴力	あり	女性	11	27.45	3.01	6.45	3.11
	あり	男性	29	26.17	5.27	7.14	4.00
	なし	女性	174	23.05	5.41	5.04	2.40
	なし	男性	115	24.44	4.48	6.34	3.05

得点範囲：依存的恋愛観9-45，暴力容認3-15

依存的恋愛観と暴力容認傾向を従属変数とし、2要因分散分析を実施した。性別および暴力加害の種類別の依存的恋愛観得点、暴力容認得点をTable 5に示す。依存的恋愛観に関しては、「精神的暴力：束縛」「身体的暴力・脅迫」「性的暴力」に加害経験の有無の主効果が見られ（$F(1,325)=5.39$, $p<.05$；$F(1,325)=11.02$, $p<.01$；$F(1,325)=10.63$, $p<.01$）、加害経験がある人が有意に依存的恋愛観が高かった。また「精神的暴力：束縛」「精神的暴力：自尊心低下」「身体的暴力・脅迫」には性別の主効果が見られ（$F(1,325)=5.07$, $p<.05$；$F(1,325)=5.11$, $p<.05$；$F(1,325)=6.26$, $p<.05$）、男性の得点が女性よりも高かった。交互作用は見られなかった。暴力容認傾向に関しては、「身体的暴力・脅迫」と「性的暴力」に加害経験の有無の主効果が見られ（$F(1,325)=17.97$, $p<.001$；$F(1,325)=4.38$, $p<.05$）、加害経験がある人が暴力容認傾向得点が高かった。また「精神的暴力：束縛」「精神的暴力：自尊心低下」「身体的暴力・脅迫」に性別の主効果が見られ、男性の得点が女性よりも高かった（$F(1,325)=18.59$, $p<.001$；$F(1,325)=20.89$, $p<.001$；$F(1,325)=14.98$, $p<.001$）。

デートDV被害経験に対するダメージの認知の検討

暴力行為を受けた場合のダメージの認知の男女差について検討するために、被害経験がある人を対象に、暴力種類別にt検定を行った。その結果、「性的暴力」に関してのみ有意差が見られ（$t(181.75)=2.65$, $p<.01$）、女性の方が性的暴力からのダメージを強く認知している傾向が示された。つまり、性的暴力以外の暴力のダメージについては男女差がないことが示唆された。

被害経験がある人のダメージの認知についてより詳細に検討するために、依存的恋愛観を独立変数に、暴力被害によるダメージの認知と暴力容認傾向を従属変数として、また暴力容認傾向を独立変数に、ダメージを従属変数として、男女別に単回帰分析を行った。結果をFigure 1

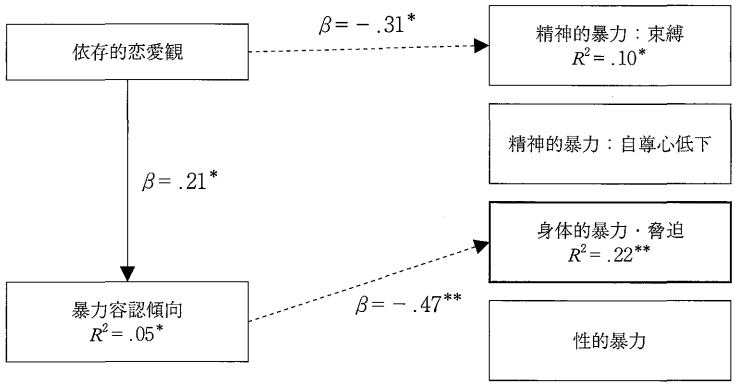

Figure 1　暴力被害経験に対するダメージの認知と依存的恋愛観・暴力容認傾向の関連（女性の場合）
（$^{*}p<.05$,　$^{**}p<.01$）

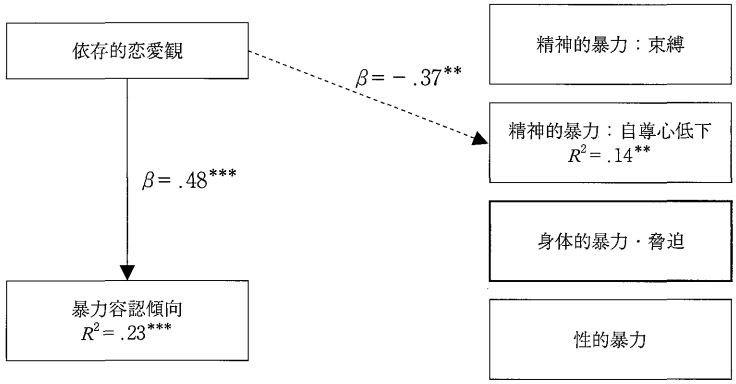

Figure 2　暴力被害経験に対するダメージの認知と依存的恋愛観・暴力容認傾向の関連（男性の場合）
（$^{**}p<.01$,　$^{***}p<.001$）

と Figure 2 に示す。女性の場合、依存的恋愛観から束縛されたり孤立させられるような暴力によるダメージに対し負の影響が、男性の場合は、侮蔑されたり自尊心を傷つけられるような暴力によるダメージに対し負の影響が見られた。また女性のみに、暴力容認傾向から身体的暴力によるダメージに対し負の影響が示された。男女とも、依存的恋愛観から暴力容認傾向にも正の影響を与えていた。

4．考　察

デート DV 被害・加害経験の検討

被害経験があるのは女性61.6%、男性52.1%であり、加害経験があるのは女性47.6%、男性45.8%であった。内閣府男女共同参画局（2015）の調査では、20～29歳で被害経験があると回答したのは、女性は30.7%、男性は13.3%であった。また大学生対象の調査では、デート DV 被害経験が「ある」「少しある」と回答したのは、女性13.9%、男性11.9%、加害経験では、女性5.6%、男性11.2%であったが（京都市，2012）、別の大学生対象の調査では、被害経験があった女性は66.2%、男性は82.4%、加害経験は64.3%、67.6%と報告されている（松並・青

野・赤澤・井ノ崎・上野，2012)。該当する暴力行為が同一ではないので単純に比較することはできないが、調査によって結果の違いが大きい。

本調査では被害経験率と加害経験率には差異が見られたが、大学生対象の調査でも、加害経験者は被害経験者よりも少ないことが報告されている（西村，2013)。

デートDV被害・加害経験と依存的恋愛観・暴力容認傾向との関連および男女差

被害経験の「身体的暴力・脅迫」以外の暴力、また加害経験の「性的暴力」以外の暴力に関して、男性の方が女性よりも依存的恋愛観が高かった。恋愛スタイルのAgapeについても男性の方が女性よりも有意に高いという結果が見られ（赤澤他，2011)、男性の方が恋人に対し自己犠牲的な傾向が示唆されている。また松野・秋山（2009）は、男性の方が女性よりも、恋人との関係を自分自身や自分の家族よりも優先的に考えている傾向があると指摘しており、現在の若者は、男性の方が恋愛至上主義で恋人を重視する傾向があるのかもしれない。暴力容認傾向に関しては、被害経験のすべての暴力と加害経験の「性的暴力」以外において、男性の方が女性よりも有意に高かった。小中学生、高校生を対象にした調査でも、暴力容認得点は一貫して男子の方が高いという結果が示されており（相原他，2008)、全般的に男性は暴力を容認する傾向が強い。Good & Sherrod（2001）は、伝統的な男らしさの要因として、強くてもの静かであることや暴力とタフさなどを挙げている。暴力性や攻撃性は「男らしさ」と関連があると思われていることから、男性の方が暴力を容認する傾向が強いと考えられる。

暴力の種類別では、「精神的暴力：束縛」については依存的恋愛観が高い人が被害を受けやすく、また加害も行いやすいことが示唆された。笹竹（2015）は束縛行為に愛情を感じる要因の1つに、束縛行為を容認するような恋愛観があり、また束縛行為に愛情を感じる場合は、被害から逃れることが困難であると述べている。依存的恋愛観をもつ人は、恋人と自分の境界線がなくなり相手と自分が一体化するような状態を愛であると感じるため、恋人を束縛したり束縛されたりするのを当然のことだと思う傾向がある。それゆえ、依存的恋愛観が高い人は加害者にも被害者にもなりやすいと考えられる。また「身体的暴力・脅迫」は被害経験については暴力容認傾向との関連が、加害経験については暴力容認傾向と依存的恋愛観、両方との関連が見られた。依存的恋愛観を持つ人は支配・被支配関係に陥りやすいが、そこに暴力を容認するような心性が加わることで身体的暴力に発展すると考えられる。「性的暴力」については、被害・加害経験どちらも、依存的恋愛観と暴力容認傾向との関連が示された。依存的恋愛観を持っている人は恋愛至上主義であり、恋人の要求にはできる限り応えるべきであるという考えを持っているので、性的な被害に巻き込まれたり加害を行いやすくなると考えられる。また暴力容認傾向は精神的暴力とは関連がなかったが、身体的、性的暴力とは関連があり、精神的暴力がより深刻な身体的、性的暴力に発展するには、暴力を容認する態度をもっているかどうかが鍵になることが示唆された。

デート DV 被害経験に対するダメージの認知

性的暴力以外の暴力のダメージの認知については男女差が示されなかった。通常は、一般的に体格が大きい男性がふるう暴力のほうがより恐ろしいという認識があるので（Hamby & Jackson, 2010）、女性の方が恐怖を感じやすいと考えられるが、実際に被害を経験している男女はダメージの認知にあまり差異がない傾向が示唆された。しかし、性的暴力によるダメージについては、女性の方がより強く認知していた。赤澤・竹内（2015）でも、被害経験によるダメージにおいて明確に男女差が示されたのは性的暴力のみであった。先述したように、性的暴力は女性の被害が多いとされているが、暴力の中でも特にジェンダーの非対称性が反映されやすいと考えられる（赤澤・竹内, 2015）。また性的暴力によるダメージは特に深刻である。村本（2001）は性的暴力の被害の影響で、パニック発作などの不安障害やアルコールや薬物への依存、摂食障害、自殺企図などの問題行動を起こしたり、再び被害を受けやすくなる傾向があることを報告している。恋人間では性行動はあっても当然という風潮があるため、被害が認識されにくく、ダメージが深刻化する懸念もあるため、性的暴力の被害については特に詳細に調査すべきである。

依存的恋愛観、暴力容認傾向がダメージの認知に与える影響とその男女差

女性の場合、依存的恋愛観が束縛されたり孤立させられるような暴力のダメージを低く認知する傾向に影響を与えていた。依存的恋愛観では、恋人とは一心同体なので秘密をもったり主体的な行動をすることは許されないとされているので、束縛されたり監視されても被害に気づかない傾向が見られる。遠藤（2007）は、若い女性には携帯メールを勝手に見るなどの恋人からの行為を嫌だと考えるよりも、むしろ愛されていると考える傾向があると述べている。束縛を愛情の証と見る風潮はメディアなどでも散見されるが、それが暴力行為の容認へとつながり、後により深刻な暴力へと発展していく可能性も考えられる。男性の場合は、依存的恋愛観が侮蔑されたり自尊心を傷つけられるような暴力のダメージを低く認知する傾向に影響を与えていた。自尊心を傷つけられるような暴力は、男性にとっては通常、女性以上にダメージが大きいと考えられるが、依存的恋愛観を持っている男性は特別な関係にある恋人だからこそ、そのようなことをされても許してしまう傾向があるのかもしれない。

男女ともに、依存的恋愛観をもつことが暴力容認傾向に影響を与えていた。依存的恋愛関係では恋人と支配・被支配関係に陥りやすいので、そのような関係が暴力を許容する傾向に関連しやすいと考えられる。恋人との依存関係は一見、暴力とは関連しないように思えるが、他者に依存したりされたりするような関係は相手をコントロールすることにつながり、それが暴力を容認するような心性に関連することが示唆された。また女性には、暴力容認傾向が身体的暴力・脅迫によるダメージを軽く認知する傾向が示され、暴力を許容する女性はたとえ身体的暴力を受けても、それを大したことではないと思う可能性が示唆された。

依存的恋愛観や暴力容認傾向が高い人は暴力を受けても、そのダメージを軽く認知することから、場合によっては被害に気づかない可能性が示唆された。艮・小堀（2013）も、若者たちはデート DV の加害者や被害者になっていても、それに気づいていない可能性もあると指摘

している。調査によって被害・加害率に幅があることからも潜在的なデートDVは多いと推定されるので、被害・加害経験の実態をより詳細に調査することが重要であると考えられる。

今後の課題

本研究では、暴力の被害・加害経験とダメージの認知について尋ねたが、暴力を経験した時期や期間を特定しなかった。同様の暴力を受けたとしても、どれくらいの期間受けたのか、またどれくらい以前のことなのかによって、ダメージが異なると思われるので、今後は質問項目の設定により注意を払う必要があろう。また、本研究では被害経験と加害経験を別々に検討したが、最も多いのは双方向型の暴力である（Straus, 2008）とされているので、今後は暴力の相互性に配慮することが重要である。

また本研究を含む多くのデートDV研究は異性愛主義を前提としている。しかし、今後は同性カップルなどセクシュアル・マイノリティのデートDVも対象にすべきである（上野, 2014）。

本研究では、被害経験や加害経験があったとしても、そのことに気づいていない、あるいはダメージを低く認知している人が存在することが示唆された。今後は、デートDVの被害・加害経験や暴力の深刻度などの実態の解明のみならず、その背後にある要因をより詳細に検討することにより、潜在的な被害・加害経験を掘り起こすことも重要である。またデートDVが生起しやすい心性や風潮を把握し、それをデートDV予防教育に活かすことが、今後ますます必要になると考えられる。

付　記

本研究は平成26年度福山大学学内研究助成金を得て行われた。

引用文献

相原真樹・上田信夫・深澤浩美・一瀬英和（2008）．暴力やいじめの予防に関する研究 PART2 暴力意識尺度改訂版（VCS-R）の妥当性と教育プログラムの効果検証について　山梨県総合教育センター研究紀要，平成20年度版，1-36.

赤澤淳子（2016）．国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題　福山大学人間文化学部紀要，16，128-146.

赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子（2011）．衝平性の認知とデートDVとの関連　仁愛大学研究紀要：人間学部篇，10，11-23.

赤澤淳子・竹内友里（2015）．デートDVにおける暴力の構造について：頻度とダメージとの観点から　福山大学人間文化学部紀要，15，51-72.

赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子（2017）．デートDVにおける暴力の頻度と精神的ダメージ：ジェンダーと暴力の双方向性への着目　福山大学人間文化学部紀要，17，56-68.

Bookwala, J., Frieze, I. H., Smith, C. & Ryan, K. (1992). Predictors of dating violence: A multivariate analysis. *Violence and Victims, 7(4)*, 297-311.

Carroll., L., Corning, A. F., Morgan, R. R. & Stevens, D. M. (1991). Perceived acceptance, psychological functioning, and sex role orientation of narcissistic persons. *Journal of Social Behavior and Personality,* 6 (4), 943-954.

Cornelius, T. L. & Resseguie, N. (2007). Primary and secondary prevention programs for dating violence: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 12, 364-375.

Dewhurst, A. M., Moore, R. J. & Alfano, D. P. (1992). Aggression against women by men: Sexual and spousal assault. *Journal of Offender Rehabilitation*, 18. 39-47.

遠藤智子（2007）．デートDV―愛か暴力か、見抜く力があなたを救う　KKベストセラーズ

Good, G. E. & Sherrod, N. B. (2001). The Psychology of Men and Masculinity: Research Status and Future Directions. In Unger, R. K. (ed.), *Handbook of the psychology of women and gender*. John Wiley & Sons.（越良子（訳）（2004）．男性と男らしさの心理学―研究の現状と将来の方向―森永康子・青野篤子・福富護（監訳）女性とジェンダーの心理学ハンドブック　北大路書房　pp. 240-255.）

羽渕一代（2013）．現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力　財団法人日本児童教育振興財団内　日本性教育協会　「若者の性」白書：第7回　青少年の性行動全国調査報告　小学館　141-159.

Hamby, S. & Jackson, A. (2010). Size does matter: The effects of gender on perceptions of dating violence. *Sex Roles*, 63, 324-331.

伊田広行（2010）．デートDVと恋愛　大月書店

伊田広行（2011）．ストップ！デートDV―防止のための恋愛基礎レッスン　解放出版社

伊福麻希・徳田智代（2006）．恋愛依存傾向尺度作成の試み：男女間における恋愛依存傾向の比較　久留米大学心理学研究，5，157-162.

伊福麻希・徳田智代（2008）．青年に対する恋愛依存傾向尺度の再構成と信頼性・妥当性の検討　久留米大学心理学研究，7，61-68.

片岡祥・園田直子（2008）．青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について　久留米大学心理学研究，7，11-18.

京都市（2012）．デートDVに関する実態調査　Retrieved from https://www.wings-kyoto.jp/publish/research/（2017年9月12日閲覧）

小柳しげ子（2003）．DVの心理構造とジェンダー　家族関係学 22，7-10.

Krahe, B., Bieneck, S. & Moller, I. (2005). Understanding gender and intimate partner violence from an international perspective, *Sex Roles*, 52 (11/12), 807-827.

松並知子（2005）．『だめんず・うぉ～か～』が売れる理由―倉田真由美的葛藤と自己愛―　女性学年報 26，79-101.

松並知子（2008）．メンタルヘルスとジェンダー　青野篤子・赤澤淳子・松並知子（編）ジェンダーの心理学ハンドブック　ナカニシヤ出版　189-208.

松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子（2012）．デートDVの実態と心理的要因～自己愛との関連を中心に～　神戸女学院大学「女性学評論」26，43-64.

牧野友紀・石田志子・藤田愛（2012）．小中学生対象の月刊コミックにおける恋愛と性に関連する言語とシーンに関する分析　母性衛星　52，4，563-569.

松野真・秋山胖（2009）．若年層における特定異性間の暴力（dating violence）に関する研究：大学生を対象としたdating violenceに関する意識・実態について　生活科学研究，31，117-128.

Miller, L. M. (2011). Physical abuse in a college setting: A Study of perceptions and participation in abusive dating relationships. *Journal of Family Violence*, 26, 71-80.

村本邦子（2001）．暴力被害と女性―理解・脱出・回復　昭和堂.

森永康子・Irene H. Frieze・青野篤子・葛西真記子・Manyu Li（2011）．男女大学生の親密な関係における暴力　女性学評論，25，219-236.

内閣府男女共同参画局（2015）．男女間における暴力に関する調査　Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html（2017年9月11日閲覧）

認定NPO法人エンパワメントかながわ（2017）．デートDV白書VOL5　全国デートDV実態調査報告書

西村愛里（2013）．大学生のデートDVの実態（1）：沖縄大学大学生のアンケート調査における被害・加害の実態　地域研究12，57-73.

李璟媛・塚本宣子（2005）．ディティングDVに関する研究―大学生の実態調査に基づいて　宮崎大学教育文化学部紀要　芸術・保健体育・家政・技術 13，1-18.

笹竹英穂（2015）．女子高生を対象とした心理的デートDVの防止講座の効果検証　シングルセッションの場合　心理臨床学研究，33(5)，441-450.

Straus, M. A.（2008）. Dominance and symmetry in partner violence by male and female university students in 32 nations. *Children and Youth Review,* 30, 252-275.

武内珠美・小坂真利子（2011）．デートDV被害女性がその関係から抜け出すまでの心理的プロセスに関する質的研究：複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて　大分大学教育福祉科学部研究紀要，33(1)，17-30.

田代美江子（2008）．「レディース・コミック」に描かれる〈恋愛〉―「恋愛＝支配・暴力」の構図―　セクシュアリティ，36，36-45.

長香織・小堀尋香（2013）．デートDVの現状と課題―大学生を対象とした調査から　宇都宮大学教育学部紀要，63，211-219.

上野淳子（2014）．デートDV研究の問題　四天王寺紀要，57，195-205.

White, J. W., Donat, P. L. N., & Bondurant, B.（2001）. A developmental examination of violence against girls and women. In R. K. Unger（Ed.）, *Handbook of the psychology of women and gender.* New York: John Wiley & Sons.（尾田貴子（訳）（2004）．女の子および女性に対する暴力の発達的検討　森永康子・青野篤子・福富護（監訳）　女性とジェンダーの心理学ハンドブック（pp. 406-421）　北大路書房）

山口のり子（2016）．愛を言い訳にする人たち―DV加害男性700人の告白　梨の木舎

吉岡香（2007）．デートDV被害女性の異性との関係性のあり方について　人間性心理学研究，25(2)，101-113.

（原稿受理日　2017年9月18日）